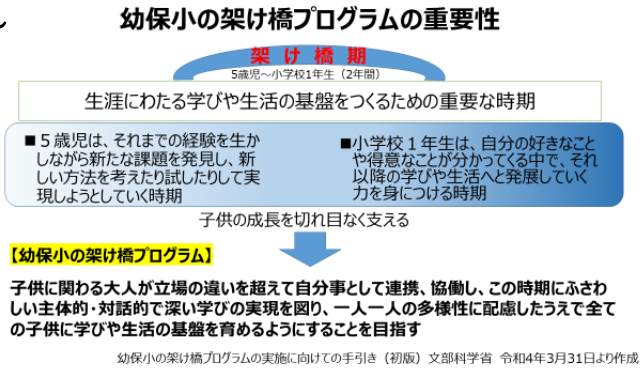
幼保小の架け橋プログラムの実施 ～文部科学省～

令和４年度から３か年程度を念頭に，幼保小の架け橋プログラム事業がスタートしました。本事業では５歳児から小学校１年生の２年間を「架け橋期」と呼び，幼児期から児童期の発達を見通しつつ，５歳児のカリキュラムと小学校１年生のカリキュラムを一体的に捉え，地域の幼児教育と小学校教育の関係者が連携して，カリキュラム・教育方法の充実・改善にあたることをめざします。また，幼児教育施設長・校長のリーダーシップと自治体の支援の下，幼児教育施設と小学校の教職員が，子供の育ちを中心に据えた対話を通して相互理解・実践を深めていくための体制構築をめざします。



○幼小連携・接続の推進

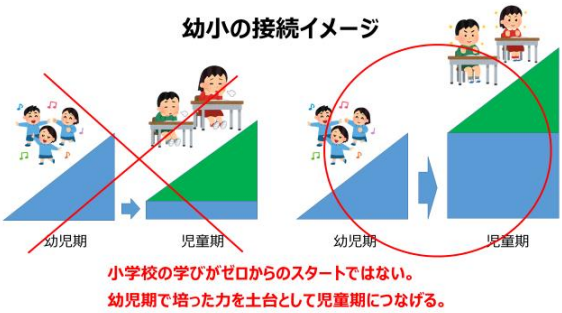
幼児教育と小学校教育は，教育のスタイルが異なるものの，子どもの育ちは連続しています。子どもの成長を切れ目なく支える観点から，子どもの立場に立ち，幼児教育で培った学びの上に小学校教育を展開していくことが重要です。

幼小の「連携」とは，主に子どもや教職員の交流のことをいいます。また，幼小の「接続」とは，幼児期と児童期の子どもの育ちや学びを理解し，アプローチカリキュラムとスタートカリキュラム（以下，「接続期のカリキュラム」という）を円滑につなげていくことをいいます。

小学校の学びがゼロからのスタートではなく，幼児期に培った力を土台として児童期につなげ，さらに力を伸ばしていくといった意識が大切です。なお，幼小の「連携」と「接続」は，車の両輪のようなものであることに留意する必要があります。

入学当初は，幼児期の生活に近い活動と児童期の学び方を織り交ぜながら，幼児期の豊かな学びと育ちを踏まえて，児童が主体的に自己を発揮できるようにする場面を意図的につくることが求められます。

生活科は，幼児期の教育と小学校教育を円滑に接続する重要な役割を担っています。

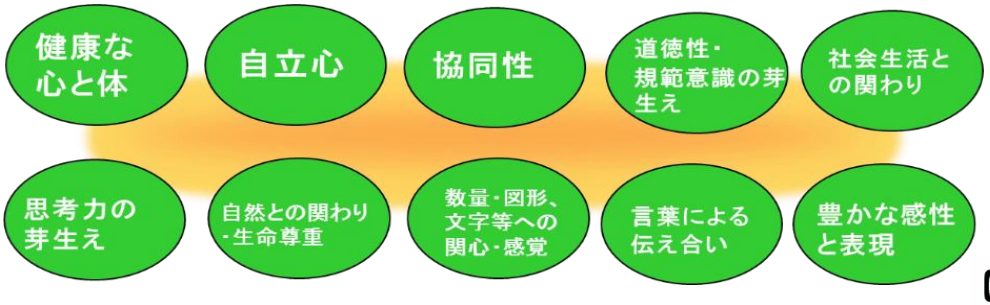


【接続期のカリキュラム作成のポイント】
- ●幼児教育施設と小学校の教職員の対話を大切にし，協働して取り組むこと
- ●作成にあたっては，共通の視点で協議を重ね，子どもの発達や成長，教育のスタイルや指導方法等についての相互理解に努めること
- ●全教職員が関わる組織的な体制づくりを大切にすること
- ●幼児期の遊びと児童期の学びがつながるように，生活科を中心とした合科的・関連的な指導及び授業時間や学習空間などの環境構成，人間関係づくりなどについて工夫すること
- ●保護者との連携を図り，理解を求めること
- ●接続期のカリキュラムの評価・改善を行い，持続的・発展的な取組とすること

○幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

幼児期の教育においては，幼児の自発的な活動としての遊びを中心とした生活を通して，一人一人に応じた総合的な指導を行っています。幼児期の遊びは学びそのものであり，遊びを通して達成感や満足感を味わったり，葛藤やつまずきなどの体験をしたりすることを通して様々なことを学んでいます。こうした日々の遊びや生活の中で資質・能力が育まれている姿を，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として以下のようにまとめられています。

この姿は，到達目標ではないことに留意しつつ，子どもの育ちを捉える共通の視点として幼児教育施設と小学校の教職員が協議を重ね，互いの教育，保育の相互理解を通して接続期のカリキュラムの作成に取り組みます。



【参考資料】
- ・発達や学びをつなぐスタートカリキュラム：文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター
- ・幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）・手引きの参考資料（初版）：文部科学省
- ・島根県幼児教育振興プログラム：島根県幼児教育センター
- ・子どもを中心につなげるしまねの幼小連携・接続（リーフレット）：島根県幼児教育センター
- ・幼小連携・接続に係るオンデマンド研修動画：島根県幼児教育センター

島根県幼児教育センターHP へはこちらから！